研究ノート

浜松中納言物語研究への遺言

A Study of Hamamatsu Chūnagon Monogatari

須田哲夫（大東文化大学名誉教授）

Tetsuo SUDA

この浜松中納言物語（以下『浜松』と記す）についての考察は、二〇一四・五年頃に、『浜松中納言物語総論』として、執筆を開始したものである。

序論では『浜松』の古名『御津（みつ）の浜松』に関連する〝シルクロード〟を始め、『浜松』中に見られる東西交流を和歌・枕草子の記述などに心を留めて考察した。

本論に入っては、この『浜松』の渡唐の道程・経路が最新の研究でも、南下し過ぎるとされ、不可解の印が押されているが、これは作者が、僧空海の渡唐経路を作品に採用したからだとこの物語中の記述から明らかにした。

この物語巻四に見られる「天の岩屋の人」まで、首軸としての空海の足跡―霊窟と曼陀羅につながる姿―の採用によるものだとした。

一方、この頃のこのローマン主義の美を十八世紀末期のドイツに酷似していると考察を展開し、その特徴を明らかにしたつもりだ。

しかし、この遠大な企ても、二〇一六年の始めより、病床に呻吟して、本論第四章の『遊仙窟』に関連する項目では、全く思考が乱れ、衰退してしまった。

これでは、後進の方にご尽力していたゞくしかないと決意し、この『遺言』を執筆するにいたったのである。

従って、『遊仙窟』は、私として、『浜松』には、大きい影響があったということで研究した者としての責任を留めることにしよう。

『浜松中納言物語総論』（未完）

序　説

西アジア＝シルクロードとの交流

第一章　もたらされたもの

日本は六世紀末から七世紀にかけて、大きな変り様を見せた。

中国は隋が魏晋南北朝の乱立の後、天下の統一を成し遂げ、次いで唐が国家統一を継ぎ、内部機構として、律令を制定した。

こゝに至るまで中国は紀元前一、二世紀にさかのぼるまで、地中海東部＝イラン、アフガニスタンに至る長大な交易路を持つに至った。アジア東西交流道筋で、いわゆる〝南船北馬〟の〝馬〟で運ぶ道である。

このシルクロードは朝鮮半島にも及び百済・新羅にまで及び、宗教、文化が、そこからも我が国にもたらされた。

百済はこの頃（西暦五三八）、特に我が国と密接な交通関係にあり、仏教伝来国に擬せられている。シルクロードの一環である。次に盛んな貢進・交流は新羅であった。極めて複雑な関係もあった。

もとより中国は密接な関係にあり、日本は小野妹子らを使とする遣隋使を推古天皇（西暦六〇七）時代に派遣した。

これより以前、中国周辺は紀元前八世紀頃乱立の中で秦の始皇帝がこれを統一したがまた滅ぶ。

日本古代との密接な関連からいうと、中国の秦漢交代期が紀元前二年より後三四世紀に訪れた。

シルクロードは多くの民族が展開し、東西文化の交流道であった。

都長安を出て、西北部に入り蘭州・涼州・甘州・粛州を経て、敦煌・楼蘭に着く。この辺りはシルクロードの入口で、玄関口に当り美人画で注目され、道は南北に分かれ、楼蘭は〝楼蘭王国〟と呼ばれる点在するオアシス都市の一つであった。道はクチャ王国など天山山脈と更に中央アジアを超え、イラン・アフガニスタン・ペルシャの流砂を越えるキャラバン隊で文化・生活品・産物が運ばれたのである。

こゝで注目すべき事態を報告する。

鳥はこと所のものなれど、鸚鵡（おうむ）はいとあはれ（かわいいの意）なり。人のいふらむことをまねぶらむ（ん）よ。郭公。水鶏。鳴。みこ（みや）鳥。ひわ。ひたき。（後略）

（本文は能因本を良しとする五十嵐力・岡一男共著『枕草子精講―研究と評釈』の本を採用し、日本古典大系本の三巻本系と比較傍書した。）

右は『枕草子』三九段（三巻本系四一段）である。「鳥は」の段の冒頭、郭公・水鶏・鴫・山鳥を差し置いて、鸚鵡が採り上げられているのには驚かれるであろう。注「西域」

これこそ、今我々が焦点を当てゝいるシルクロードを代表する渡来品なのである。

この鸚鵡は、『重修本草綱目啓蒙』三十三林禽）ではパタン王国の産であり、「此の鳥、南海の産にして　和産なし」と記述されている。

平安朝の清少納言の他の人に似ぬ生動的感性に驚きもするが、このいわれている〝パタン〟が、インド北西部のデリー（現ニューデリー）を首都とするアフガン人系の住む、広くアフガニスタンを指示する呼称である事にも驚かされる。そして「羽色鮮麗比すべきものなし」と記する。

このシルクロードとの交流は、〝鸚鵡〟についていえば、

① 大化三年（六四七）、新羅より孔雀一隻・鸚鵡一隻（隻は一羽のこと）〈紀〉

② 斉明二年（六五六）、百済より還りし人、鸚鵡一隻を献ず。〈紀〉

③ 天平四年（七三二）新羅使、鸚鵡一口（匹のこと）を献ず。〈続日本紀〉

④ 承和十四年（八四七）、入唐求法僧慧雲孔雀一、鸚鵡三狗三を献ず。〈続日本後紀〉

⑤ 治暦二年（一〇六六）、宋人商客、種々の霊薬と鸚鵡を献ずるも鳥は途中で死んでしまった。〈扶桑略記〉

⑥ 永保二年（一〇八二）宋人の商客、鸚鵡を献じたが、『本朝無題詩』（二・動物）にも、宋商人、鸚鵡を献ずと聞くとある。

⑦ 久安三年（一一四七）・久安四年（一一四八）には、白河法皇・藤原忠実にそれぞれ鸚鵡が宋の商人から献じられている。

これらは、当時の鸚鵡献進の道筋までも明らかになって来る。①の大化から②の斉明・③の天平までは新羅が二回、百済が一回献じているが、これらの国は前述したように自国の産ではなく、中国を通じ、遠くシルクロードの道を経て、我が国に伝えられ、平安朝に入っては④の渡唐僧侶（恐らく遣唐使の船に乗船して渡唐したのだろう。この頃、承和五年に出発している）による献上を見るに至った。すると多くの遣唐使船使人による献上が想定される。以後は宋商によるものとなる。

当時の対外海路は推古天皇時代（六〇〇）に始まり、北路（朝鮮経由）と南路・その他渤海路があり、初期は北路が主で新羅・高句麗・百済との交流がなされ、次いで隋と唐へ遣隋使、遣唐使（十八回中六回までが北路）が南路を取る事になる。これは朝鮮半島の国々よりも、隋・唐の国内事情と文化の成熟を重く見た遣唐使の進言によるものであった。

前に見た鸚鵡の朝廷への入進活躍の場面もそこから生れたにちがいない。

この他、仏典（インドを源流とする）・仏像・象牙・沈香・織物・文物としては張文成の『遊仙窟』ももたらされて、平安貴族の間にもてはやさ

れた。

隋・唐は早くからシルクロードに密接な関係を持ち続けたから、いわゆる〝唐物〟には極めて強い影響を受けている。

前にも指摘した『枕草子』七七段（三巻本では八八段）の「めでたきもの」の段でも

めでたきもの　唐錦。かざり太刀。つくり仏のもく。色あいよく、花ぶさながく咲きたる藤の、松にかかりたる。

と「唐錦」が採り上げられて来る。「唐錦」は、奈良時代・聖武天皇没後（七四八年）、天平勝宝年間に光明皇后が亡夫の冥福を祈り、収蔵し始めた正倉院は、調度品・文房具・絵画・楽器・染織品・香木・楽面・楽服・仏具・典籍・書蹟などを集めたものであり、数次にわたり納入され、その中にはシルクロードを経て我が国にもたらされたペルシャ（イラン）ササン朝のガラス器という逸品が収められている。

清少納言がいう『唐錦』も、このペルシャ系の染織物で、赤・青・黄色の糸をたて糸・横糸にして織ったものである。正倉院の古い織物は「錦」と呼ばれ、その図柄も、狩猟模様・珠の連続する円い模様、樹下に動物のいる図・葡萄唐草模様など、大陸的色彩が濃厚で表現も太く、直截な線である。

これらは唐に入るとあざやかな配色となり、線も繊細で、狩猟の図が、東洋的〝龍〟（向い合って二匹）となって行く。

清少納言は鮮烈な色合、大きな図柄をほめて〝見事なもの〟といっているのであろう。

又、儀式用の、金銀で飾った太刀の立派さを上げ、木で造った仏の木目（木のきざみのよさ）・六位の蔵人の許された葡萄色の綾織の衣装を讃美している。「錦」のついでゝある。この「錦」と呼ばれるものゝ源流は、ベトナムに近い乱立時代の四川省の蜀（西歴二三―二八年以後唐）の国の産物であったと美術史家[註1]は指摘している。前に楼蘭・敦煌の所で述べたふたまたに分かれる南方にくだる道である。これは唐代七世紀に蜀江錦と呼ばれる赤地・桝形模様である。

シルクロードとの関連で、正倉院の宝物で、この〝飾り太刀〟と密接な意味があるのは、アフガニスタンの青金石は〈金銀鈿荘唐太刀〉として珍重されたということである。

また、絵画の方面では「鳥毛立女屏風六扇」が重要な存在で、後に発見された奈良県明日香村の〈高松塚古墳〉の壁画（六世紀初め・古墳時代末期）にも似たものがあって注目されたが、その屏風絵は一枚ずつで対をなし、亡き人をともらう屏風であり、この正倉院の屏風は六枚から成っており、樹下の人物も生々としている名品である。この〝樹下人物〟の構図は西アジアを源流とし、眉と豊頬に特徴があり、髪・着衣・樹・石に雉・山鳥の毛が張り付けられた痕跡がある。註一『飛鳥・白鳳の美術』Ⅱ（学研社・解説者中野政樹執筆）

シルクロードは唐に入る前、隋（五八一―六一八）が続き、それ以前、楼蘭王国は朝鮮半島諸国を経て、我が国にまで珍品を渡海させたことは〝鸚鵡〟の例証でも明らかで、楼蘭王国は遥るかロード西域に手を伸ばしていたのである。隋・唐（六一八―九〇七）になると、独自に国家統一が

なされ、唐も体制が整え、シルクロードとの関係を蜜にし文化を受け容れた。

こうしたシルクロードの豊かな文化も永く続いた二毛作により、四世紀より七世紀にかけて、沙漠化した。

それ以前、塞族（春秋戦国時代・紀元前六世紀より前二世紀）は、城を築き、寺院を造り、黄金の首輪の美事な壁画を営んだ。美人画も旺んである。

唐代に入ると、これらに影響を受け、唐風も加味した巨大な岩壁に浮彫した仏像群、華美な錦・絹・綉（わた）などがたて糸・横糸・図柄の巧緻さとともに珍重された。

村上天皇・天暦年間（九五〇頃）成立の『宇津保物語』蔵開上に、

また源中納言の北ノ方の御もとより、あかり色の織物の唐衣…後略…

とパットする赤色の織物（唐衣）が注目される。

その後、『源氏物語』若菜上に、

蔵人所・納め殿の唐物ども多く奉らせ給へり。

ともあり、『古今集』離別部（三八五番歌）の藤原兼茂歌の詞書に、

藤原後陰が、唐物の使ひに、なが月のつごもりがたにまかりけるに（中略）よめる。

とあり、唐からの商船が入った時、朝廷より、その貨物の中から入用の品を優先的に買い上げる特役として派遣された事が分り、実に興味深い。

栄花物語にも「唐の綾錦を多く入道殿（道長）に奉り給ひて」（巻十六「もとのしずく」）に登場する。

本題の『浜松中納言物語』巻一にも、

（A）たゞ大かたの調度は赤きに、朱塗りたるさまにて錦の縁さしたる御簾ども（後略）と述べ、同巻一には、御簾ではなく、

（B）錦を敷ける縁に十餘人ばかり、ならび居たり。（これは敷物という広さである。）と愛用され、「大かたの調度の赤さには異なる錦」と

して、「朱塗り」の華美さが強調されているのは注目される。

平安時代、この他珍重されたのは、〝白玉〟（白石）である。

『本草目訳義』（八巻金）及び「重修本草綱目啓蒙』（巻五玉）の項は、「本条（項目）は白玉ヲサス（指）。和産加州・豊後（金沢・大分）等ニ出ルモノハ多クハ瑪瑙ニシテ、玉ニアラズ。舶来器（唐の渡来物）ニ作リタル玉ニ白色アリ。（中略）玉ハタ・ケバ声アリ。

と記し、水晶などと共に正倉院の宝物として収蔵されている。六朝・隋・唐の産物である。

『栄花物語』巻十六「もとのしずく」にも、この白玉が登場する。

「舎衛国の女人…（中略）白玉の奥石（軟かい石）に坐し…（中略）錦繡・黄金・珠玉の飾り…云々。

と述べて、舎衛国＝インド国内の一国の渡来品として、珍重の様子がうかがえる。

このインドは、「天竺」と呼ばれ、日本古代人の憧憬の的であった事は、八世紀の『日本霊異記』に、まず天竺の部があり、『今昔物語集』にも天竺の部があることによっても明らかである。天竺僧菩提遷那ら三人も逆に来朝する。

―難　波―

その古代交流の拠点が帰港地、出港地である〝難波〟であった。数次の「堀割・池を作り疏通」して来た。応神天皇（二六〇）・（三二三）頃より改築を進め、それまで住吉の津が表玄関であったのを「難波の堀割」を更に改築し、これを国港とし、遣唐使もこゝから発着させ、以後、遣唐使十八回の中、八回目（七一七・養老一・三）よりは第十四回目を除き、皆難波出発となる。勿論、都をこゝに移し、「難波長柄豊碕宮」と呼び、筑紫へ航する船も、一旦は、この難波に足を止め、筑紫に向った。

この古代史上、重要な港都は「御津と呼称された。我々が攻究している『みつのはままつ』（後世の呼び名「浜松中納言物語」）も、これに当るのであり、斉明天皇・斉明二年（六五五）、都を「飛鳥岡本宮」に移した後も、この港都であった地は、「みつ」と呼ばれて生き続ける。

A　まず、『万葉集』巻一（雑六三）に遣唐使として派遣された山上憶良のよんだ歌

詞書に「大唐にありし時、本国を想ひてよめる」がある。

いざ子ども、はやも大和へ

大伴のみつの浜松待ち恋ひぬらむ

B　また『万葉集』巻十五（離別三五九三）に、詞書に「新羅に使わしゝ使ひ人等、別れを悲しみ贈答する」という歌があり、

大伴の御津に船乗り漕ぎ出ては

いづれの島に庵りせむわれ

これは当時の航海の難儀さ偲ばせ、「大伴」と「御津」の上に冠するのは、遡って難波辺りは、大伴氏の支配する一帯であったので、枕詞的に使うようになったということである。

歴史が反映されているのも興味深い。

C　更に『古今集』（九〇五）巻十七・雑（八九四）「題知らず。よみ人知らず」歌に

おしてるや難津のみつに焼く塩の

からくも我は老いにけるかな

の歌があり、「なにはのみつ」にかゝる「おしてるや」は、〝すみずみまで照り輝く〟の意で、都である『難波』の照り輝く形容の言葉として、後々まで使われているのも興味深い。和歌の世界では中世まで使われる「大伴の」であり、「難波」の輝きなのである。

これまで指摘して来た、応神・仁徳（二世紀末から四世紀）にわたる堀割の拡張が、やがて淀川の遡上となり、平安京の前身である〝長岡京へとたどって行くのもうなづける。

全くこれまで述べた内陸のシルクロードに対し、「海の道」と呼ばれた、アラビア海・インド洋沿岸・マライ・インドシナ半島沿岸を経て、中国南部に達する〝道〟もあったことと同様、人間の営みのすばらしさである。

―鑑　真―

鑑真の存在ほど、複雑で偉大な意味をもたらしたものはない。当時、日本の仏教は正式の戒律がなかった。信仰に篤い聖武天皇は、天平元年（七四三年、栄叡・普照を派遣し招聘した。承諾した彼にはその後、五度の難波が待ち受け、その間、盲目となり、六度目に来日した。鑑真は我が国に仏教の戒律のみか、その道場としての唐招提寺を建立（七五九）した。

―みちのく中尊寺の金色堂[註1]―

中尊寺の〝金色堂〟を観る者は誰もおのれの眼を疑わずにはいられない。

荘厳にして、黄金色の精緻な美術・工芸の結構は、実に極楽を想定した阿弥陀仏の世界である。その装飾品は、前に述べたインドから始まる〝海の道（シルクロード）〟による〝香木〟〝紫檀〟、〝夜光貝〟による巧緻な螺鈿に、その美がもっとも現わされており、『栄花物語』の場面でも指摘した〝白玉〟の類も豊かに使用されており、エジプト技芸の影響である。もちろん〝京の文化〟をも攝取し、地元奥州の、〝金の産地〟であることが十分反映されずには見る事の出来ない絢爛豪華さである。

奥州藤原四代の、この地まで国内で産し得ぬ、シルクロードの文化がもたらされて来たことはまさに驚異に価いするものといえるであろう。

註1　遠山崇著『甦（よみがえ）る秘宝』（岩手日版社版）を多く参照しました

第二章　求めゆきし者たち

―玄奘三蔵―最澄―空海―成尋阿闍梨―

仏教の源流の地は天竺（印度）であり、そこに向って、強い〝憧憬〟が生まれ、まず中国から洛陽を出発（生まれは河南省六〇〇）した人が最初の玄奘三蔵である『西暦六二七年（貞観元年）には天竺に向けて求法の道を辿った。前に述べた楼蘭・カシミールを経て、北インドマカトラに入った。この沙漠は危険の道であった。

しかし玄奘三蔵は目的である戒賢論師を訪ねる道を続け、天山山脈・バーミアン盆地など越え、マトウラに入り、マガタ国ナーランダ寺にて、老師戒賢論師に教えを請い、『瑜伽論』を熱心に研究した。この中で後の法相宗が生まれていくのであるが、中国での法相宗相の祖は、唐代の慈恩大師（六五〇頃）であり、その師が玄奘三蔵である所をみると、薬師寺の僧道昭は入唐して三蔵から学んだから、本来、薬師寺は天武天皇が、皇后の病気平癒を登願したこの寺域に、自己の師僧である三蔵の記念碑〝三蔵院伽藍〟の建立という朱色紺青の目を見張る世界を展開させてくれた。唐からシルクロードへ、そして日本へと転送されて来たわけである。三蔵は貞観二〇年（六四六）はこの天竺求法の旅を『大唐西域記』十二巻として執筆成立させる。彼の死は西暦六六四年で長安の白鹿原に葬られる。

日本の最澄と空海は当時〝憧憬〟の地、中国に師を求めて、秘法を学び伝えんと、藤原葛野麿を正使に、石川道益を副使とした第十六度遣唐船（四つの船。八〇六）に乗船して目指した。最澄は天台宗を深め、『法華疏』『摩訶止観』を僧たちから得、行満師より天台圓宗の旨を受け、帰朝後、桓武天皇に奉り、大いなる賛同が広がった。

最澄は初め、天台宗のみか密教を志していたが、最澄の弟子泰範が空海に附くにいたり、間隔が広がり、空海自身も最澄に密教を開示という〝想い〟があって、第一船、第二船と袖をつらねて乗船したが、最澄は唐の明州に着岸し揚州周辺に足を向け、都長安には行かず、天台山修禅寺にて道邃に学び、天台宗（比叡山）を開くことゝなる。この時、空海は更に南方の福州長溪県赤岸鎮に着いて、長安に入京した。

特に都長安の青龍寺にて恵果より胎蔵界・金剛界の灌頂を受け、真言密教を伝承する。

最澄は翌年帰国するが、空海は更に年を越して、大同元年（八〇六）十月帰国し、『請来目録』を献上し、「大日経」・「教王経」等をもたらし、これを受けて、最大の理解者となったのは嵯峨天皇（八〇九即位）で、仏法・書法・華道にわたり援助した。

空海は、讃岐国多度郡弘田郷屏風浦の生まれで、古い国造佐伯氏の出身であり、大伴氏に近かった。十九才にして、阿波大滝嶽・石鎚山・土佐室戸崎の霊窟に坐修していたことは特記すべきであろう。

この日本の山岳信仰を基にして、密教・道教・神道が混合したわが国特有の宗教である修験道が成立するのである。空海の自伝『三教指揮』（下巻）『性霊集』（巻九）にはその様子が看取される。

こうして、唐から宋代に入って、斎然（百錬抄）・寂照（紀略）の入宋の志をはさんで延久四年の大雲寺の僧成尋が強い意志で入宋を遂げ、各地を廻り、『参天台山記』によれば、同行した弟子僧に託し、新訳経百余巻を本国に送り届けたのが、〝求める者〟の姿の新しい頂点であろう。（以下略す）

（附記）

この遣唐使以後絶えて（八九四。菅原道真献策による）、宋代までの道程は、本論で述べる『浜松中納言物語』巻二に、「その世（日本）の人、この世にわたる事、絶えて久しうなり侍りけるを、はじめて繁う渡り」と、作者が知っていた事を証明しているのは興味深い。これについては、拙著『平安朝文学の展開』（おうふう）中の「浜松中納言物語の構想と更級日記―渡唐を中心に―」参照。

浜松中納言物語

本　論

第一章　菅原氏の学問（者）の家より受領の家への推移

この拙著自体が、『浜松中納言物語』が、更級日記の作者と同一である証明となるものであるが、学界でも、石川徹氏をはじめ、藤岡作太郎・池田利夫らの諸氏によって、御物本『更級日記』の藤原定家の伝えた当時の伝承と共に同一作者論議に参画することゝなる。

さて、菅原氏の源流をたづねると、土師（はじ）氏に当る。そして菅原改姓を願い出た古人（ふるんど）が、和名抄に、奈良（古くは大和添下郡菅原郷）菅原に住んでいたので、その地名を姓とした。

さて初代菅原古人は、坂本太郎氏（以下吉川弘文館刊『菅原道真』以下菅原氏の叙述）によると、『続紀』延暦四年十二月の条に「故遠江介従五位下菅原宿禰古人」と記されているので、この位にあり、侍読の職にあったという事になる。『続日本後記』の菅原清公（きよとも）の伝によると、父の古人は

儒行世に高く、人と同ぜず、家に余財なく諸児寒苦したと記されているのであるが、その中で学問をする人が出たのは、桓武天皇の外祖父が土師で恩恵があったにちがいない。

次に出て来るのは古人の第四子清公である。十五才で皇太子係、二十才で文章生となり、延暦二十一年（八〇二）には遣唐判官となり、同十三年に入唐した。この時の遣唐使は藤原葛野麻呂が大使で、前に述べた最澄・空海も一緒で、彼のその後の学問に大きく影響した。帰国後、大学助となり、時の政治に〝寛仁の政〟という刑罰を用いない施いた源となった。また宮殿に額を掲げさせる嵯峨天皇の唐風模倣の風も、これを推進したのが清公であった。唐の地に派遣された体験と式部少輔の地位とがそれを主導させることとなる。

その後、弘仁十年（八一九）には文章博士となり、承和六年（八三九）従三位になり、公卿の列に入ったのである。

清公は、自家一族のため〝文章院〟を建立し、情深く物を愛し、殺伐を好まず、名利を争い求めるような人物ではなかった。学問とともに生きる菅原氏の精神史的立場が確立されて行く。

この清公には四人の子があり、第三子善主（よしぬし）と第四子是善（これよし）とがすぐれていた。

善主は聡明で容儀麗しく、弁舌が爽やかであった。文章生から弾正少忠となり、承和の遣唐使判官として入唐し、父子二代にわたる遣唐の使に任じられたのは、家の名誉であったが、早く従五位下で、五十才で歿した。

是善も幼少より聡明であった。淳和天皇承和二年（八三五）二十二才で文章得業生、承和六年（八三九）対策及第して、文章博士・東宮学士など要職を歴任した。その後、文徳天皇時代に至り、正五位下となり、仁寿三年（八五三）大学頭に任ぜられ、更に左京大夫、刑部卿を経て、清和天皇貞観十四年（八七二）参議となり、式部大輔を兼ね、元慶三年（八七九）従三位に叙した。

扶桑略記の彼の伝に「天性、事少く、世体忘るゝが如し、常に風月を賞し、吟詩を楽しむ。」とある。『貞観格式』『文徳実録』などの編修に参与した。『文選』『漢書』『後漢書』の講莚をはり、当代広く知られた学問一家の栄誉に満ちていた。そしてその個人的内面は、父と同様に仏教を深く信じ、人を愛し、殺生を好まなかった。念仏読経をもっぱらとした。

この彼の父清公は吉祥院を建立し、十月中に死ぬことを願い、十月十七日に歿した。是善も、十月にわがために功徳を修せよと遺言したが、八月三十日に歿した。この一家の〝信仰〟への度合いが学者の家としての伝統と共に知られる。

是善には三人の子があった。道真はその第三子である。

道真の母は伴氏（とも）である。この人は夫是善に先立って歿する。夫と同様仏教信仰に篤く、菅原氏の学者の家という伝統に熱心であった。

久方の月の桂も折るばかり　家の風をも吹かせてしがな　（拾遺集・番号四七三）

という和歌も道真の「初冠」りの際に、科挙の試験に及第して、父祖の業を継ぐように念願した賢母の願いが躍如としている。

道真は父祖三代の（弱点を含めて）輝しい学者の家の伝統をしっかり受けとめ、その天成の才能と資質は一層磨き上げられて行ったのである。時代は藤原氏の抬頭と共にこの菅原氏の大きな障害となって展開して行くことと大きな悲劇を生むことゝなるのである。

それが、『浜松中納言物語』の作者によって、どう受けとめられているかが注目すべき問題となる。

この頃、文章生となった者は菅原清公、善主そして小野篁（たかむら）はそれぞれ、二十才、二十三才、二十一才で、道真は十八才である。篁は「和田の原八十島かけて漕ぎ出でぬとあまにも告げよ沖の白波（あまの釣船）」という流罪の歌があって、道真の流罪と照応して面白い。

道真のその後の足跡をたどると、文章生を経て、正六位下を授けられ、下野権少掾に任じ讃岐守に任ぜられた。そして彼が五十五・六才の折、時は宇多天皇から醍醐天皇時代に転じ、五十七才には右大臣に達した。三善清行（娘が道真の妻）は時の権力者左大臣藤原時平の圧力の下、道真に辞職を勧めた。権勢家の道真への嫉妬、反撥から圧力を加えたのであった。後の『大鏡』（国史大系本）によると、

共に世のまつりごとをせしめ給ひしあひだ、右大臣は才（ざえ）よにすぐれ、めでたくおはしまし、御心おきてもことの外にかしこくおはしけり。

とある。

当時、道真の娘は、醍醐天皇の弟・斉世（ときよ）親王の妃になっていた。時平は道真が醍醐天皇を廃し、斉世親王を立てる陰謀を計っているとざんげんし、若い醍醐天皇はそれを信用して、道真を流罪に処した。

これらを結論づけると、家系として、精神史的意味を考えると、菅原氏の伝統は、「仏心深く」「人と同ぜず」「儒行世に高く」「風月愛賞」の日々が跡づけられて来る。

これを主題の『浜松中納言物語』に比定しみると

（A）この物語の主人公中納言は、首巻欠巻部において、「仏道修行を好んだ」と考えられる。『風葉和歌集』（一三五七番）に、

中納言のもとに、暁立ち寄りて侍りけるに、いみじく尊く経を読み澄まして居明かしつるにやと見えければ

とあって、人物像が浮かび上って来る。

（B）この『浜松』（以下略す）の一つの基定である〝転生〟である。

唐土に渡った中納言が邂逅した河陽県后は唐国の「えらびの使い」＝唐の秦王が筑紫に使され、筑紫に流罪されて来た人（親王）の御娘と結ばれた結果生れ、唐土に連れかえられた人であった。

（C）道真は親王ではなかったが、物語中では、中納言の「父」は、巻二と巻三に「宮」と呼ばれ、現在の欠巻首部が見出されない限り、「式部卿宮」と解釈されている。その子の中納言は〝賜姓源氏〟となる。このことも興味がある事である。

（D）道真は、流罪にあった時、少女一人、男子一人をつれて行った事が彼の漢詩に遺されているが、

以下三つの『浜松』の記事にはその間の内容が示されているように思う。

Ⅰ「（秦の親王は）えらびの使にて日本に渡りたるなりけり。筑紫に流され給へりける（日本の）親王（みこ）の、やがてそこにて亡せ給ひたりける御女（巻一）

Ⅱ「父宮とても、世にあひ給ふやうにもなかりし古宮腹の、我が身の才、琴笛の音のすぐれたるをのみ猛き事にて、この世に過し給ふ事はたづきすくなげにおはせしを、ましておほやけに罪せられ給ひて、筑紫へ放たれおはせしに…（巻三）

Ⅲ 上野宮（かんづけ）と申せしゝ人よにおはしき。身の才などこの世には過ぎて、いと賢しこうおはせし程に、おほやけの御ため、すぐならぬうれへを負ひ給ひて、筑紫に流され給ひけるに―中略―かしこにて父宮亡せ給ひにければ…。（巻三）

と語られているのを発見するのである。

Ⅰの記述は少女が一緒であったことを知らせる。

Ⅱは、「父宮」が、「世にあひ給ふやうもなかりし古宮腹」であった。古宮腹とはいえないが、前述したように、桓武天皇の祖母、皇太子夫人の母の土師真妹（ま）に正一位を追贈し、菅原の姓を賜った。

一族は、『扶桑略記』の伝によると、道真の父是善は、「世体忘るゝが如し。常に風月を賞で、吟詠を楽しむ」という状態であった。

道真は是善の第三子で、正六位上で宮中いり、上流人士の「表」「願文」多数を依嘱され、名誉を博し、文章博士となる。渤海使との交流を司り、従五位上となり、やがて従二に叙せられた。右大臣にも昇る。

それ以後、前述の藤原時平らのざんげんにあうのである。

『浜松』のⅡは、この一族の「世にあひ給ふやうにもなかりし」性格を明示している。

『浜松』のⅢは、「身の才などこの世には過ぎて、いと賢しこうおはせし程に、おほやけ（朝廷）の御ため、すぐならぬうれへを負ひ給ひて…」と述べ、〝ざんげんにあった〟と明示されて、前述の道真の歴史的事実がしっかりと浮びあがらせられている。

こうした記述は、菅原氏一家の精神史的意義を明らかにして行くが、『更級日記』の作者の父菅原孝標（たかすえ）の代になると、文章博士になる事がかなわず〝学者の家〟としての名誉はすたれた。むしろ孝標は和歌に心を寄せていた（これは別の意味で道化だ）のであろう。更級日記の作者の母の外に、上総大輔と呼ばれる歌人を別に持ち、任国の上総国に作者と共に連れて下り、上洛もし、作者とこの上総大輔との間は別離の後も、和歌をやりとりしていて間は濃厚である。その文学的影響が考えられる。

孝標の後の息子定義は文章博士に復しているのをみると、孝標の時期がしのばれる。

しかし、その定義も、孝標が上総国の介であったように、和泉国司となり、受領（国司）一族となるのである。

孝標の父は右中弁従四位上資忠朝臣と奥書に記述されているから、この頃から菅原氏は受領期に入ったのであろう。

孝標は、寛仁元年上総介になった後、長元五年にも常陸介に任ぜられるのである。

こうして、〝祖先古人時代より学者（問）の家〟であった菅原道真は、円仁『顕揚大戒論』の序文を草し、師最澄の教えを継いだのを始め、多くの上流人士の『願文』を草しただけでなく、歴史上貴重な『類従国史』を編纂し『渤海客使』にも任ぜられた家であったのである。

前章で見た、〝名門学者（問）の家から受領への家の展開〟は、平安朝中期より後期に向う史的展開である。今それを検討するものとして、更級日記の上洛の記と将門記に共通して見出される〝武蔵国武芝伝説〟について考察をすゝめることゝする。

まず、興味ある『更級日記』における武芝伝説であるが、寛仁四年（一〇二〇）九月三日に、上総国国府より、父孝標と共に出立し、十二月二日に京に着く。その間の九月に、秋の武蔵国・武芝という地の「武芝といふ寺」を通る。「これはいかなる所ぞ」と聞くと、「これはいにしへ、武芝」といふ荘（原本さか）なり…後略…。」その地の男が衛士として宮中に召されて、つぶやいた。「武芝ではふくべが風になびくのどやかさよ」の言葉に帝の御女は強い関心を示し、「私を連れてお行き」といゝ、宮中を脱出した。

さて、地方選出の衛士の男は、「香ばしきもの首にかけ、飛ぶように走った。」というのですから、表現として、すばらしい感性であります。これがこの作者の美学であります。

また、橋を渡ってしまってからは、男は御女を据え、橋の一間をこぼちて、「七月七夜」で、武芝に着いた。追手は三十日かゝったというのですから、まさに壮大なロマン主義の跳躍であります。帝の御女は、「この男の家ゆかしくて…中略…いみじうこゝありよく覚ゆ…中略…帰って公（おほやけ）にこの由奏せよ。」といゝ放つのである。今まで「帝の」といわれた「帝の使い」は、二度も「公の使い」といゝ直されているのだが、これは都の生活の否定、束縛からの脱出を主張しているのである。

さて、次は歴史的な『将門記』に見られる武芝の記述である。

『将門記』は、承平五年（九三五）頃に歿した平将門の記録である。天慶三年（九四〇）に執筆された。そこに武蔵武芝は登場する。

将門は、延喜三年（九八一）頃の桓武天皇の一子高望王の一子、平良持の子であったが、承平元年（九三一）に、一族の争いにまきこまれ、志を得ずに、下総国に下った。一帯周辺の国々に大いに勢力を張り、国の派遣する受領（国司）を追放し、〝新皇〟と写したが、侠気にあふれた人物であったことがこの作品中にそれが見られる。治世上の事で武蔵武芝と介源経基・武蔵権守興世王との争いが治まることを願い、間に入った。それが武芝との接点であった。

この関東一帯は親王任国で、その受領としての権限は強かったが、噂には「興世王は道理に外れた所業を専らとし、郡司武芝は道理を守って行動した。…中略…「武芝が郡を立派に治めているという評判は武蔵国内によく知られており、民を慈しみ、育てる手立ては広くひろまっていた。」

ということになる。これがいくつかの伝承を生み出礎地であり、『更級』や『将門記』に別々の伝承が残っていること、なる。

ところで、『将門記』には、その末文に「天慶三年六月中記文」の記述があり、この年の二月将門は歿しているのである。更級日記との関連でいえば、九四〇年より以前、承平八年（九三〇）頃には〝武芝伝説〟＝評判は既に定まっていたと考えられるので、この将門記の首巻が欠いたとしても、遠くはなれた叙述と考えられる。

それ故、更級日記の作者が聞き伝えた〝皇女脱出事件〟は将門記以外の地元の興味ある伝承であったと考えられる。

前述の百年の間に、「いやしくも、武芝の郡を治むるの名は頗ぶる国内に聞ゆ。撫育の道は普く民家に在り。」と評判の高かった武芝の名は、拡大に拡大を続け、武芝の若年期に遡って、いくつもの伝承が生まれ続けられたにちがいない。その一つのものが更級日記の作者の聴聞したものであろう。引用は（『将門記・陸奥話記・保元物語・平治物語』新編　日本古典文学全集41　小学館　二〇〇二年）による。

さて、話を本筋に戻して、菅原道真失脚の後も、直ぐ後の高視は大学頭、雅規も文章博士と続くが、それぞれ山城守になり、一族の人々も寧茂は豊後介、景行は常陸介、景鑒は周防守、淳茂は大学頭になりながら早死し、その子の在躬は大和守、その子輔正も文章博士になりながら近江守、丹波権介、播磨少揚、その他の人々も一人で武蔵介、日向守、常陸介、豊後介、讃岐守、丹波守となり、文章博士にならない人も多くいる。

こうして、学問の〈家〉一族は、受領の〈家〉へと推移して行くことがうかがえる。

更級日記（＝浜松中納言物語）の父孝標（タカスエ）の時代になる。孝標の父資忠も文章博士・大学頭にはなったが、和泉・周防・因幡・淡路の権守を歴任し、早死した。孝標はその影響もあり、文章博士にならず、上総介・常陸介で終ったのである。その子、定義は文章博士・大学頭に復したが、和泉守になり、『平安遺文』第六八一番・第六八二番に、定義が寛徳二年（一〇四四）に訴状を出し、〈新立の荘園の停止の制が守られていない〉を訴えた時の訴状が載っている。

こゝで、定義は、「前司（国）季定乍レ存ジ二此符ヲ一、猶以加レ フ免ヲ、勤王之吏、豈以ツテ可ケンヤレ然ル乎…後略…

こゝで、作者の兄定義は、「勤王の官吏」としての自負まで吐露しているのである。完全に〈受領の家〉の人士なのである。

この時、想い出されるのは、玉井幸助氏が『朝日古典全書』の更級日記の解説で、孝標が治安三年十月の藤原道長の龍門寺に立ち寄ったのに従駕して、祖先の真名の筆跡の傍に、仮名文を書き付け、人々は嘲笑したと述べられていることである。前述の〈上総下り〉の際の妻を同行させず、歌人の後の上総大輔を連れて行ったこと―これが更級日記の文学嗜好に「人間観に大きく影響したと愚考しましたが―と併せて何か意味がありはしまいかである。

Ⓐ　この時期は『新猿楽記』などの平安末期の社会の危機感が増幅され、新しい階層の出現をも迎えた。

そんな折俗世間、孝標のような人物は、どんな行動に出たか、形式主義にこり固った貴族を念頭におき、常識はずれの行為に出たのであ

る。

ヨーロッパの世紀末退廃の時代の十八紀末から十九世紀初頭にかけては『世紀末の美と夢』第二巻、華麗なる頽廃ウィーン』辻邦生編集英社を参照すると、この時代の特徴は、

（イ）やみくもに行動する心理

（ロ）形式主義にこり固った宮廷やブルジョアジーを嘲笑する。同時に世の物を茶化す〝道化〟の風潮を生む。が挙げられている。これなどチャップリンの芸術を想えばよい。これなど孝標の取った行動を裏打ちする。突きつめられた社会の抑圧の下から吹き上げて来るもの＝心の叫びが主張され、共感された。（イ）は浜松中納言物語に見る亡父の転生を知りやみくも出掛ける主人公のそれだ。そこには、私が執拗に追求して来た※平安朝末期の女流日記・物語―更級・浜松・寝覚―に見られる〈地上の権力・地位・立派な建物〉をも否定し、恍惚としている姿勢が一個の〝社会（体制）批判〟となるのであった。

また、一方では、本筋のものを茶化して、〈道化〉の精神で表現するという風潮がドイツの浪漫主義の世紀末には出現した。浜松中納言物語の作者の父孝標にもそれが見られるのは指摘したところである。

※『平安朝文学の展開―方法論の探求を含めて―』おうふう。一九九四年。

第二章　首巻散逸部の構想と精神

―この散逸部を蔽う憂鬱と行動―

（一）この主人公源中納言は、無名草子によると式部卿宮である。当時、式部卿宮は親王がなったので宮である。中納言の住む邸（亡父の邸）も、現存巻一・巻二で、「宮」と呼ばれる。

つまり、この物語は〈賜姓源氏物語〉なのである。以下中野荘次・藤井隆による『増訂校本風葉和歌集』のすぐれたご成果と拙見による復原を試みる。

亡父式部卿宮が二位であったからであろう中納言は三位相当官なのに「二位ノ中納言」と呼ばれている。位の踏襲である。

中納言は輝くばかり美しく、学芸は世人にぬきんで秀いでいた。しかし父宮は前述の如く急逝した。我が子の栄達と内親王との結婚・降嫁を願

っていた矢先きであった。

父宮の妻、中納言の母はひどく悲しんだが、いつからか、隣家の左大将が、母の所に通うことになり、中納言の心は母の思わぬ変心にいきどおったという。この思わぬ変心は更級日記の作者が、父の上総国への赴任の際の実母ならぬ女の同伴に抱いた人間不信からにちがいない。

中納言は、この物語全編を蔽う〈思い澄ます〉という仏道修行に専心するこゝろを芽生えさせた。

この心を芽生えさせた一人、左大将には二人の姫君がおり、とりわけ姉の大君を宮中に入内させたいと願っていた。この大君と妹中君の姿を春の夕暮に、豊かに美しい黒髪を持つ女として発見し、中納言の道心が乱れた。

大君への恋慕が始った。「世の人に似ぬひが性」といわれていた中納言の心に変化が生じた。中納言は鳥辺野（当時の貴族の葬地）に立つ煙を見て、大君にもしも私があの世に行ってしまったら悲しんでくれますかと問いかけると、

けぶりけむ人をたれとも知らぬだに夕べの空はあはれならずや（風葉和歌集・巻九哀傷六六〇番）

と大君は答えた。〝あの煙が誰のものとも知らないでさえ夕暮れの空は悲しいのですからましてあなただったら一層悲しいはずです〟という意味である。

またこの頃帝に、もう一人式部卿宮と呼ばれる親王がおられ、自分の思いをかけた女を執拗に求める好色漢であった。この大君にかねてより思いをかけていたが、父左大将は許さなかった。

大君は中納言の「世の人の心に似ぬひが性」を信じ、石山（寺）詣でを共にした。中納言もまた義理の兄妹でもあることから、その関を越えることはしなかった。しかし中納言には愛が芽生えて行った。

そうこうしているうちに、唐から帰った者を通し、亡父宮が唐の第三皇子に転生したことが伝えられた。中納言の心には〝やみくもに〟再会の気持が高まり、今は宮中でも重職につき、母の「心くだきておぼし嘆く」のを振り切って、三年の勅許を得たのであった。

ある夜、中納言は大君の侍女宰相の君の困惑と制止に耳を貸さず乱入して結ばれてしまう。衝動の現われである。大君もこれに大いに驚き、父左大将も激怒した。—懐妊までしたのだから—。

その中納言公が「渡唐を思ひたち侍るとて」、前述の帝の親王、式部卿宮—『華麗なる退廃』で指摘されるべき人物—風葉和歌集・離別・五三一では「はまゝつの東宮」を記載されている人物が「いとまきこえける」のであった。

いかばかり涙にくれて思ひ出でんにしにかたぶく月を見つゝも

と月の下で詠んだ。中納言はその折、「おぼし入り」「終夜読経」の最中であった。

大君は認められた結婚でもない懐妊に悲しんで、

うしとだに思ひ出でじと思へどもなほあまの戸を明け方の空（風葉和歌集・一四一六）

と、尼になる想いもこめて歌を詠んだ。

同じ折、宰相中将も、こうした中納言の姿を見て、訪れると感嘆し、

ひとりしもあかさじと思ふとこの浦に思ひもかけぬ波の音かな（同十八巻・雑一三五四）

と詠んで慰めた。

大君は父左大将の、中君にかの式部卿宮を婿取りせしめたのも心恥しく、煩悶して

いかにしていかにかすべきなげきわびそむけばかなし住めば恨めし（『無名草子』）

世をそむいて出家するのも悲しいし、世にながえるのも恨しいと思ったのである。

大君は突然、八尺もある美事な黒髪を切った。親たちの驚き、周囲の人の嘆きは一方ならぬものであった。父左大将は中納言を今更ながら恨み、中納言の母も同じ屋敷に住みながら出家させてしまったわが怠りを責めた。

大君は自ら出家したもの、我が身が恨しく、かゝれとも撫でざりけむをうば玉のわが黒髪の削ぎ末ぞうき（『無名草子』）

と詠み、つらい我が身を嘆いた。

侍女の宰相の君も涙にくれたが、尼君となった大君は、中納言によく似たかわいゝ女の子を生んだが、世間の人の眼を思うと、肩身が狭かった。そして中納言の帰国を思うと、奥山に籠りたいと仏道修行にいそしんだ。

この児姫君が二才になり、周囲は明るくなるのであったが、中納言はこの誕生を知らない。

〝やみくもに〟唐土に渡った中納言は今どうしているのか、無事に渡れたのか（現存巻一の冒頭の心理の反映）と、中納言の身の上に想いをはせるのであった。

第三章　『浜松中納言物語』巻一に見られる〈入唐知識〉—巻四に及ぶ—

—空海の渡唐経路に関連して—

孝養の心ざし深く　思ち立ちにし道なればにやおそろしうはるかに思ひやりし波の上なれど—中略—風なんことに吹き送る心地して、唐のうむれいといふ所に—中略—おはしつきぬ

と冒頭が初まる。この〈温嶺〉が、今は雲岭といわれ、諸注がいわれるように浙江省にある。ところが、池田利夫氏がその著『浜松中納言物語』（小学館・新編日本全集）の頭注で言及されたごとく、「次の寄港地の杭州に遙るか南である。」先学としての瀬利さくを、山川常次郎、宮下清計、松尾聡の諸氏も、おゝむね〝文学作品上の所為〟〝作者の筆の粗雑〟とされた。

私は既に『校訂浜松中納言物語』（勉誠社）にて分析し、物語中ではもっと先の「歴陽といふ所にて船とめて」とあり、こゝまで水路であった事を指摘した。中国では南船北馬の句があるように水路が発達し四通八達なのであった。

では、「風、吹き送る心地して」、〝遙るか南の温岭〟に着かせたのは物語作者の〝粗雑〟〝文学上の所為〟なのか。

そうではないようである。主人公は次にこうほたうに行ったことになっている。この〈たう〉を〈こう〉と読んだ宮下氏は「或は黄浦江か」とされた。草体文字の移り具合からである。そして歴陽へつながる。

次は、〈かざん〉に行く。これまで〈華山〉としたから、陝西省にあるものとなったが、次の函谷関を考えると後戻りである。この矛盾を「作者の地理不案内」としてよいかであった。ところが、刈谷図書館本では「花山」とあった。『中国古今地名大辞典』（中国出版）にこれを求めると、「山上有二彩色輝映一、望ムニレ之レヲ如シ花」とあった。こゝを越して函谷関に至り、物語中では、「この関に迎への人々来たり。」と述べられ、洛陽に入らず、西都長安に向ったのである。

これは〈空海〉の経路と同じである。この長安には昔潘岳（物語中でははくがんとある）がいて活躍したのであり、作者はこの文人を念頭において書いている—河南省出身の詩人である—。

空海は風に流され、福州（福建省）長溪県赤岸鎮に着くが、この福州は浙江省の隣りで主人公の着いた〈うんれい〉が「南、遙るか」といわれているのと同様で遠くにある。この時、同行した最澄は四ツの船団の第二船、空海は第一船であった。—最澄は洛陽の前で止まった。—

つまり、転生し可陽県の后の第三子となっている父に会うという、「やみくも」な気持からすれば、「思ふ方の風」であったが、〈空海渡唐の経路〉を採ったこの物語作者は、「遙るか南」に人物を着かせ、そこから、出発させることゝなったのである。

七月十日に「うんれい」に着いた主人公は前述の経過を経て、都長安に達し、「いつしか三の御子に」と思いつゝ暮した「八月十日余日」、帝の居る内裏のほとり近くの河陽県に后とその御子（中納言の転生した亡父）の住む所に招ねかれた後、この日、中納言の住む高楼に人々は集まり、詩を詠作することゝなったのである。

ほど経て、十月一日、「洞庭といへる所に」帝は「みゆきし給ひ…」、河陽ノ后も、中納言も、国中の人々も集い、そこで中納言は麗しい后を初めて見出す。

この折、若き女房七、八人ばかりが、「菊の花もてあそびつゝ、詩を声あはせて誦じ」、「御簾のうちなる人」（后を含むと考えられる）も、「この

花（菊）開けて後」と口ずさみ、誦じた。中納言は、その時「第三のみこ」が出て来られたので少し退ったが、永遠に忘れえぬ〝菊の夕べ〟の事となった。

その後、陰陽師のいみじゆうさとし」あるにより、「内裏のほど一日ばかり去りて、山陰といふ所にみそかに移られた。

この山東省の〈山陰〉は、詩人・王子猷が住んだ所で、己の王子猷は空海が師として仰いだ〈書聖王羲之〉の子である。

この物語作者はこゝまで、〈空海〉にこだわっているのである。

そして、更に巻四にも「さぞかし…もろこしまでたづね行きて、さま〴〵の人をば見給ふぞかし。…中略…いみじからん天の岩屋よりもただ我心つきて、思ふさまならん人をだに見つけらば…後略…」と、好色の式部卿にいわせているが、〈空海〉が土佐国の霊窟にこもり、修行した空海の曼陀羅の世界に通ずる―序論にて前に述べた―折、日本書記を読み、以前天皇にこの書の懇請したのが推測（年表にて）される時、この天照大神の突然の出現も不自然ではないと思われる。

こうした、この物語全体の姿を観る時、我々は、作者の中の〈空海〉の存在は、大きいと考えられるのである。

第四章　浜松中納言物語巻一に見られる

遊仙窟＝道教・神仙思想・かげりからの復活（隠れ里）思想

これらの〈思想〉は、道教を源流としている。道教は中国の紀元前五世紀から始まるが〝不老不死〟の思想であるが、日本に入って来たのは奈良時代の末、五世紀の末である。

古くからあった山岳信仰に合体し、神仙境（蓬莱山）としての憧れを吉野（山）に求めた。

当時、天皇は〝不安・かげりが見えた折、それからの回復〟を求めたのであった。

〈桃源郷〉も、単なるユートピア（理想郷）ではなく、圧迫された人の、〝かげりからの回復・隠れ里〟であった。

浜松中納言物語でも、「河陽県の后の父大臣はこの后が十四といふ年に宮中に入り給ひ、父の宰相（職名）も大臣になし、后も十六才にて親王を生み給ひたりければ、一の后の父、一の大臣大きに怒りの心をなし、そねみて―中略―皆人心ひとつになして―後略―」といった状態なので、（河陽県の）父の大臣は「世の中あぢきなくて大臣の位かへし申し出で」て、山里に隠れ住んだというのである。

さて、唐初の『遊仙窟』は、張文成の作で、冒頭「僕」で始まる物語で、文成自身の語りである。文成は帝に仕えるが、その命により、仙窟を目

指す。黄河の源流をさかのぼり、谷川に沿って行くと、桃の花が咲き乱れる所にたどり着く。この作品では桃源郷とはいっていないのが、『浜松』とは異なるところである。『浜松』の換骨脱退であろう。

（以下省略。未完）

〈追伸〉 須田哲夫の『浜松』についての未完のこの続きの輪求は、大東文化大学・日文学科刊行の雑誌『日本文学研究』第三十八号（一九九五年二月）をご覧いたゞきたい。「『更級日記』作者像の輪郭」に詳細に記している。

著者